

日本におけるスポーツの政治利用に関する一考察 －スローガンとしての〈健全なる身体に健全なる精神が宿る〉－

今泉 隆裕

Takahiro Imaizumi : A political use of the slogan of sports in Japan

--- "A sound mind in a sound body"

Abstract : There are many slogans for promoting sports in Japan. One of the most well-known among them is "A sound mind dwells in a sound body". It is known that this phrase which came from Junius Juvenalis's Latin poem was also used in Nazi Germany. In Japan this phrase has been circulated since the Meiji era. Trouble with this famous proverb is that Juvenalis never assured "A sound mind in a sound body" because the original poem merely said " We only wish a sound mind dwells in a sound body".

Whether this misrepresentation was intentional or not, it helped the sport policy of the pre-war Japan. The strong and healthy body would nurture a healthy thought, thus preventing people from unhealthy radical thoughts as well as venereal diseases, it was claimed. In order to create strong and healthy men with sound mind students were urged to engage in physical exercises of one kind or another. This process seems to have somehow affected the Japanese psyche ever since. One example is the case of a novelist, Yukio Mishima. He became an ardent bodybuilder, believing that the robust body would benefit him in writing vitally his novels. He didn't hide his disdain of his fellow novelists whose way of life and writings were feminine.

Key words : Slogan, Junius Juvenalis, Guiding thought "SISOUZENDO", novelist, Yukio Mishima

キーワード : スローガン, ユウェナリス, 思想善導, 三島由紀夫

1. はじめに

“A sound mind in a sound body” と か “mens sana in corpore sano” の訳として知られる〈健全なる身体に健全なる精神が宿る〉なる格言がかつて通行していた。しばしば、耳にしたこの格言はそもそも誤訳で、じつは存在しない。にもかかわらず、ことばはひとり歩きして戦前政治的に利用された。このことは意外に知られていない。

この格言の典拠は古代ローマの諷刺詩人デキムス・ユニウス・ユウェナリス(Decimus Junius Juvenalis, 67ころ?-138ころ?)の『諷刺詩』の一節であるとされている。〈健全なる……〉は、その第十歌で、詩人が人間の奢侈を戒める件にみられる。

我々にとって何を祈るのがふさわしいのか、我々の今の境遇にどんな願いごとが役に立つのか、その判断は神々の意志にお任せするがいいと。(…中略…)それでもあなたが、神々に何かをお願いしたいのならば、(…中略…)どうか、健全な身体に健全な精神を与え給えと祈るがいい¹⁾。恐怖を断つ強敵な精神を祈願し給え。生涯の最期を自然の恩恵とみなすような精神を。いかなる苦しみにも耐えられる精神を。怒りを知らぬ、無欲恬淡な精神を。(傍線筆者、『ローマ諷刺詩集』岩波書店、2012年)

富、地位、才能、栄光、長寿、美貌などを願ったところでろくなことはない。奢った人間は何を願うべきか。願うべきは「健全な身体と健全な精神」であると詩人は説くのである。引用からは『諷刺詩』において〈健全なる……〉が「宿る」とは断言されていないことがわかるだろう。じつは引用の後には「……情痴淫蕩、酒池肉林、奢侈榮華よりも、ヘーラクレースの艱難辛苦や奮励努力こそ、いっそう望ましいものと信じるような精神を祈願し給え」とつづき、奔放なローマ社会を戒める風刺詩になっている²⁾。が、それはそれとして、ここに「……宿る」とあったなら、肉体の〈健康／不健康〉がそのまま精神の〈善／悪〉につながるように受け止められるであろう。しかし、ユウェナリスは「……宿る」とは述べていないのである。そのような件は存在しない。むしろ健全な身体には健全な精神が宿ることがないことが多く、そのことを戒めているのであった。

この〈健全なる……〉は日本に限らず、ドイツにおいてもヒトラーが『わが闘争』や、演説で繰り返し引用したことで知られる。同様に、日本でこの格言はスローガン(標語)と化して浸透し、言外のニュアンスも含めて、人々の思考を呪縛したのであった。

そこで本論では、格言の真意や、その伝播についてふれながら、それが政治利用され、いかにスポーツとかかわったのか、その一端を垣間見てみることにしたい。

2. 戦前の〈健全なる……〉

1) 存在しない格言／誤訳としての「……宿る」

じつは〈健全なる……〉が「宿る」と断定されていないことは戦前日本でも田中祐吉(田中香涯とも)『間違だらけの衛生』(大

阪屋號書店、1920年)によって指摘されていた。

田中は大阪大学医学部の前身大阪医学校本科を1894年に卒業し、ドイツに留学経験もある医師で、日露戦争では軍医中尉、台湾総督府医学校、京都大学第二医学部にも出向し、1914年まで大阪府立高等医学校で病理学教授を務めた人物、のちに在野に下って雑誌『変態性欲』を発刊、性研究者として南方熊楠と交流したことで知られる。

この『間違だらけの衛生』は、雑誌『日本及び日本人』の連載がもとで、民間療法等にみられる健康法(「強健法」)の誤りを指摘し、医者としての最新の知見を紹介する内容だった。

同書「誤れる體育」のなかで田中はこの〈健全なる……〉を取り上げる。

『健康なる精神は健康なる身體に宿る』といへる語は體育家衛生家に眞理金則の如くに信ぜられ、身體を強健にせば、従つて精神も亦立派になるかのやうに思われてゐる。併し元來此の語は羅馬古代の詩人ヂユヴエナリスの『健康なる身體に健康なる精神のあらんことを祈れ』Orandum est, ut sit mens sana in corpora sanoといつた詩句から出たもので、其本來の意味は決して健康なる身體に健康なる精神の宿ると断言せしが如き格言では無いのである、(…中略…)然るにいつの間にやらOrandum est, ut sitの上句が取り除かれて唯下句だけが残し、果ては健康なる精神は健康なる身體に宿ると誤解誤訳せらるるが如きこととなつた。

戦前において〈健全なる……〉に「……宿る」と断定する下りは存在しないことは、すでに指摘されていた。しかし後述するようにこの格言は「金言」「眞理」として政治利用されることになる。

ちなみに、戦後になると遠藤繁清が「『健全なる精神は健全なる身體に宿る』に就て」(『日本醫事新報』1955年4月)で「『健全なる精神は健全なる身體に宿る』という言葉は、明治から聞き慣れ、屢々偉い人からも云われるので、何となく動かし難い定理のように響き、従つて健全なる精神は病弱者に無いもの、病身の人の精神は不健全だと烙印を捺されたやうで、弱い人に氣の毒な感じがする」として田中同様のユウェナリスの原文を引用して、その誤りを指摘している。興味深いのは遠藤がその小稿の最後に「東大の緒方富雄教授の御話によれば、此の問題は嘗て十数年前に一度論議された事があつたとの事、そしてかのラテン語の起源が不明であるから、従つて此語の最初の眞意が那邊にあつたか判然しないけれど、普通用いられて居る日本語譯は確におかしい……」と加えていることだ。十数年前に議論されたのなら、戦前、田中以外にも一部の識者のあいだでは、この格言が誤訳であることは共通に認識されていたことをうかがわせる³⁾。

それでは、そもそも存在しない格言はどのように日本で定着したのだろうか。

2) 日本移入された格言

日本において、この文句は、はじめから「……宿る」で一般化した。この格言を日本に移入したのは、日本体育の父・リーランドと考えられる。

ジョージ・アダムズ・リーランド(1850 - 1924)は、1878年(明治11)に来日し、1881年(明治14)まで東京女子師範学校、および東京師範学校で教鞭をとった。リーランドの体育思想はキリスト教的な世界観および心身観にもとづいている。彼によれば世界は神の創造したもので神は人を創造した際、道徳性・智性・体性の三つを与え、その三者は互に連関して、そこに軽重はなく、その調和的な発達こそ重要であると述べる。いわゆる三育主義である⁴。その講義録『(李蘭士氏講義) 體育論』にこの格言がみられる。

身体の完全発達せざる人は、道徳も又衰る事は医学上より論断して明なり。又善く人の知る如く、是迄身体強健、心の活潑なる人も病を為せし後は、其人の心大に衰へ(ふ)る事あり。殊にDyspepsia (不消化病) 心(神) 経病等を煩(い)へし後は、癩癰を起し人を嫌悪し勉強力を失う等は往々見る所なり。……今を去る二千五百年前の古昔に当て羅馬人は“mens sana in corpore sano” (Sound mind dwells in sound body) 強健の精神は強健の体に存するという事を題目となし、大に此語を尊崇し、今に至る迄世人此語を排撃する与はざる金言を今の世に示せり(本文は、今村嘉雄『学校体育の父 リーランド博士』(不昧堂、1968年) 所収資料「一、李蘭士氏講義 體育論」による)。

リーランドが、このように「……宿る」と断定的に用いているのは、当然、『諷刺詩』の〈健全なる……〉が欧米で「……宿る」で周知されていたことと関係している。ちなみに水野は前掲書(1967)で、ジョン・ロック(1632 - 1704)が、その『教育論』(1693年)の冒頭で“A sound mind in sound body”を引用したことから「……宿る」というユウェナリスの意図とは異なる理解が生じたのではないかと推測をしているが真偽はわからない⁵。東京女子師範学校、東京師範学校でリーランドに学んだ学生たちは全国でその言葉を教授することになる。かくして「健全なる……」は「宿る」として周知され、日本で定着したのであった。

こうして日本に伝わったユウェナリスの言葉は、やがて戦前、政府による思想善導政策のなかでスローガンと化して利用されることになる。

3. スポーツの政治利用／思想善導とスポーツ

1) 思想善導なる「赤化防止」

思想善導は1920年から30年代にかけておこなわれた思想統制で、天皇制国家の支配原理と相容れない、デモクラシーや社会主義・共産主義などの外来思想を「国民思想の悪化」をまねくものとして把握、排除し、国民の「人心を作興」せんと、恣意

的な「善導」を意図するものであった。

ちなみに戦前の大日本帝国憲法では主権は天皇にあり、基本的的人権も保障されていなかった。「日本臣民ハ法律ノ範圍内ニ於テ言論著作印行集会及結社ノ自由ヲ有ス」(明治憲法第29条)とあり、臣民は法律の許す限りの権利だけが保障され、デモクラシーや社会主義・共産主義は非合法活動とされた。帝国議会も貴族院と衆議院からなる以上、前近代固有の身分制を前提とした社会であったとわかるだろう。したがって、「善導」や「健全なる精神(思想)」は体制を脅かさないものに限られることになる。

この思想善導は大正12年(1923)9月の関東大震災後「国民精神作興に関する詔書」が發布され、翌年1月14日に貴族院でその基本方針が説明されたのををもって嚆矢とされる。

そのなかには次のような件がある。

今日の急務は人心の作興と經濟の発達とである。人心の作興に就いては、主として教育の改善に努めねばならぬ。思想の善導も亦必要と思ふ。(傍線筆者、『時事新報』1月15日付)

この「思想の善導」は、演劇等々様々な分野に広がり、弾圧が加えられ、言論統制がなされていくことになる。また、それまで西欧化を急いできた日本が、日露戦争に勝利したこともあり、西洋文化をやみくもに受け入れるのではなく、選別する必要性が強調され、そこから「日本主義」とも思想善導は結びついていく⁶。したがって「善導」は、外来思想の排除を伴いつつ、「善導」の名のもとさまざまな恣意的な判断がなされた。大正14年(1925)からは治安維持法とともに思想善導が展開されていくことになる。

昭和2年(1927)陸軍大将・田中義一が政権をとると、翌年2月第1回普通選挙が実施された。その際、共産党系無産政党的活動、躍進に危機感を抱いた政府は、「思想の善導」を大義として、3月15日に治安維持法違反容疑で全国の共産党員を一斉検挙している。いわゆる、「三・一五事件」である。この事件を契機として思想善導はそのまま「赤化防止」「左傾化防止」を目的とするようになっていった。

三・一五事件では1000名を超える共産党関係者が検挙されている。そのうち147名が学生(現役学生30名、卒業生48名、中退者69名)であった。関係する学校は32校に及び、全起訴者中、学生は4割を占める。「検挙学生の多数は帝大系学生／当局を一驚せしめた全国的な学生加盟」(『東京朝日新聞』1928年4月11日)。この状況から文部省はその対策をせまられることになる。

文部省は当初、思想善導費30万円を予算要求し、各学校の学生主事、生徒主事にそれを配布した。実施されたのは、茶菓子を購入しての茶話会、あるいは遠足、運動会などで、そこで教員と学生の親睦が図られた。学生の実態把握を試みたのである。さまざま思想善導策が試みられるなか、やがてスポーツ

が利用されることになる(野上荘吉『日本教育界暴露記』自由社、1930年、荻野富士夫「文部省思想統制体制の確立 - 学生運動取締と思想善導」『歴史評論』校倉書房、1983年2月に詳しい)。

2) スポーツによる思想善導／〈健全なる……〉のスローガン化

スポーツに熱中(熱狂)させることで、政治への関心をそらす。

その出発点は、三・一五事件後の5月17日から開催された五帝国大学生監会議などでの提案だった。そこで学生の思想取り締まり策が協議され、三・一五事件で学生が多数検挙された原因を「知育に偏し徳育に欠陥」があった。その対応策として「学生熱を運動の方面に向けて悪思想の注入を防ぐこと」が掲げられた。加えて「体育競技、運動の仕合等が、民衆の興味をそそり、選手は映画俳優の如くファンが出来るといふ現象を呈してきた」というから、観客の政治関心も削ごうとしたことがよくわかる。

哲学者の戸坂潤(1900 - 1945)は「学生スポーツ論」(1935年〔昭和10〕)のなかで、哲学でも文学でもスポーツでも、それらには「阿片的効果」があり、耽溺というかたちで「社会的関心とか実際生活の計画性とかから隔絶」させる効果があると指摘していた。

一頃スポーツは学校教育ではあまり優遇されなかったものである。ところが幸か不幸か、第一次大戦以来、「日本人」の思想も、世界の人間並みに悪化してきたので、即ちマルクス主義が学生の「アヘン」(?)となり始めたので、社会における教育当事者は、これに対抗すべくスポーツを別のアヘンとして大安売りし始めたのである。……(『戸坂潤全集』第四巻、勁草書房、1966年)

戸坂はスポーツそのものに内在する興奮が、政治への無関心を促すことを危惧していた。しかし政治から学生や大衆の目をそらすことを目的としたスポーツ奨励は政府によってその後も先鋭化し、スポーツをしない人間は「悪思想」⁸を持つにいたる、というロジックを持ち出すまでにいたる。そこで利用されたのが〈健全なる……〉である。

これは北豊吉「體育運動と思想問題」(『体育と競技』1928年〔昭和3〕10月)に端を発するもので、その一節にユウエナリスの〈健全なる……〉が引用され、利用された。文部省学校衛生課長兼体育研究所所長の北豊吉は、その論稿冒頭ではかの思想善導政策と同様、外来思想、とくに共産主義を念頭に筆を起す。

……過激派が其の皇室を亡ぼし、富豪を抑へて天下に號令し、茲にソビエト政府を樹立せらるゝや、其の共産主義をもって全世界を席捲せんとするに會ひ、我が國の思想界がこれより受けたる實際的影響も亦少なくなかった。……

そして日本でも思想および行為が往々にして「奇矯過激」にな

り、「国体」を脅かしていると述べる。とくに三・一五事件(本文中は「共産黨事件」)は「實に國家の一大事である」と云わねばならぬ。そこで体育界に身をおく、北自身も「國民思想の安定のために一臂の力を致さん」として、「體育運動による思想善導に関し、茲に所信を披歴し、以て大方識者の注意を喚起したい」とつづけ、體育運動が思想善導に結びつく根拠としてユウエナリスの「……宿る」を引用する。

扱て體育が吾人の身體に及ぼす効果は最も顯著、明瞭なるものであって、肉體の完全なるを期し、其健康を保持せんとするに體育運動が必要にして、且つ缺くべからざるものなるは明かなる事實である。①「健全なる精神は健全なる身體に宿る」といふ金言は、實に千古の眞理にして、此の②肉體の健否が吾人の精神思想に及ぼす影響の至大なるは、吾人の常に経験するところである。今日まで、③極端なる思想を所有し、其の實行に趨つた人々の多くが身體に何等かの缺陷を有する者であつたといふ事實に徴しても、これを察知するに難くない。かゝる理由の下に、吾人は合理的なる體育運動を國民の間に徹底せしめ、以て不健康なる身體の所有者を可及的に減少せしむることは、同時に不健全なる思想の所有者を益々減少せしむる一方策ともなり得ると信ずる者である(①②③の記号、および傍線筆者)

まず、ここで注目にしたいのは①の箇所であろう。前述したように、そもそも「健全なる精神に健全なる身體に宿る」という文言自体は古代ローマにさかのぼっても存在しない。にもかかわらず、「千古の眞理」として正当化されている。

さらに、この格言を前提にして、②③でみられるように肉體の健否(健康／不健康)が、直ちに思想に影響するかのごとく述べる。③には不健康な身體がそのまま「極端なる思想」(共産主義)を宿すという類比(アナロジー)がみてとれるだろう。肉體の健否が、そのまま思想の善悪へとつながるという論理展開がなされているのである。

こうした理解は、のちに「所謂過激思想の如き不正常的な思想は、多く體力の薄弱者、従つて精神異常者の間に醸成せらるゝことが多い。殊に結核患者の自棄的気分と抱合し易い可能性を多分に持つてゐる。故に我等は思想國難救済法の一つとして、強健なる體力の建設を一大國策とすべきことを提唱する。……健全なる肉體の所有者は、その進むべき道を誤るものではないと確信する」(山田敏正「思想國難に面して」『体育と競技』1928年6月)という極端な言動まで促がすことになる。こうした言説は、この同時期、これに限らず無数に積み上げられていった¹⁰。さらには不健康な人間、あるいは特異な容貌の持主が共産主義者であるかのような言説まで登場してくるが¹¹、その前提に〈健全なる……〉が影響しているといつていいだろう。

それらは、あたかも「脆弱な肉體＝インテリ＝マルクス主義」「強壯な肉體＝スポーツマン＝日本主義」といった図式を前提にしてステレオタイプ化されていく。

北はその論稿のなかで体育運動が「其の愉快の中に、總ての鬱憤を晴らし、其の興味の中に、總ての偏倚にして破壊的な気分を忘却せしむる」とも述べており、戸坂潤の先の引用の表裏の関係にあることがみてとれるだろう。「スポーツを別のアヘン」として利用しようとする姿勢は、戦前の政府関係者には色濃くあったことがわかる。

とはいえ、ありもしない格言が考証されないまま受容され、正当化され、さらにはスローガンと化して利用されたことがわかるであろう。

3) 性病防止のためのスポーツ利用

また同時期、スポーツは政治から目をそらすためのみならず、性欲の減退を意図しても実施されている。思想善導のためにスポーツが利用された言説でよく知られる鳩山一郎『スポーツを語る』（三省堂、1933〔昭和7〕年）のなかには次のようにある。

青年はその旺盛なる體力、知識慾をどこかに發散させようとして、無意識のうちにそのハケ口^{くち}を求め合つて居る。國事多端の非常時に際して、ややもすると、有能なる學生にして左翼の思想に浸み、轉向してゆく者が少なくない。僕は、スポーツの普及、スポーツマン・スピリットの浸潤が、左傾しやすい青年を、その本來の正しく健全なる思想^{ひきもと}に引き戻す為にも、極めて有力かつ重要な機關であると信ずる。

じつはこの言説に先行して「まづ青年諸君をして、最も危険な誘惑^{ゆうわく}の手引きとなり易い、飲酒の悪癖^{みぜん}を未然に防止する事に役立つ。喫煙のこと固より然りと云つていい。煙草を飲み、酒をたしなんでいる様では、到底、競技に優秀なレコードを擧げることがむづかしい。青年をして邪道に踏み入れしむる『誘惑^{ゆうわく}』の手から引離^{ひきはな}す意味^{いみ}合^あひからも、スポーツはそこに非常な道徳性を持つ」とも述べられている。

じつは鳩山は明言をしていないが、スポーツは性病対策の目的にも用いられ、奨励されるようになっていく。スポーツによって体力を消耗させ、性欲を減退させる。結果的にそのことが性病の蔓延を防ぐと考えられたのである。たとえば下田次郎『運動競技と國民性』（右文館、1928年〔昭和3年〕）には以下のようにある。

運動競技は性慾からの危険を防ぐ。運動しない青年は性慾に煩わされ易い。運動すると、身體の精力の餘剰が、運動の方に最も自然に放出されて、忘想^{ママ}を起さず、疲勞してぐつつり一息に眠つてしまふ。即ち運動家は、大體性的早熟や、性慾の異常や、亂用に陥らない。性的發育の順調は、今日生理學でやかましい生殖腺の外分泌の作用を順調にし、男女の身體（精神までも）を、最も男らしく、又は、女らしきものとする。（「第四節運動競技の實用的方面」）

同書にも冒頭「健心は健身に宿る／Mens sana in corpore

sano」（8頁）が引用される。が、それはそれとして抗生剤の普及以前、性病は脅威とされ、なかでも淋病と梅毒は世界中で恐れられた。19世紀末は、細菌学の黎明期で1879年にネセルが淋菌を、1905年にホフマンが梅毒スピロヘータを発見している。1900年ころには梅毒はそれまで考えられていたよりも重く、伝染性が強く、長引く病気であると考えられるようになる。そのため人類の脅威とみなされ、恐れられた。

アラン・コルバンによれば、ヨーロッパでは1900年ごろから、スポーツのもたらす気晴らしと疲労が性欲を遠ざけるとされたらしい。「古代ギリシア・ローマにおいても、今日でも、つねに運動選手は非常に劣った雄鶏と考えられてきた」、そして「運動競技は性的能力を減退させる一因である」とする、ル・ビール博士の言説などをコルバンは紹介している（アラン・コルバン「性病の脅威—公衆衛生による予防と道徳による予防」『現代思想（特集：〈流行病〉のエピステーメー）』20・6、1992年6月）。「運動家は、大體性的早熟や、性慾の異常や、亂用に陥らない」とする下村の発想もこれに同じだろう。

性病が、性行為によってもたらされる脅威である以上、この時期から若者を管理下におく、性教育の必要性が強調された。実際にスポーツと性欲に相関があるのかは疑問だが^{12,13}、禁欲は必要以上に宣揚され、性欲を減じるためにスポーツが奨励されたのである。

やや大げさに聞こえるかもしれないが、性病予防のためのスポーツ利用は、のちの優生学同様、性の国家管理とも結びついていくことになる。そう考えれば、軽視できない問題をはらんでもいるだろう。これは公衆衛生の広がりとともに世界中に見られる傾向で、日本も例外ではなかったことがわかる。スポーツによる性欲減退の言説については別の機会をもちたい。

4. 浸透した格言／三島由紀夫と〈健全なる……〉

繰り返しになるが、不幸なことに、前提となる「千古の眞理」とされた〈健全なる身体に健全なる精神が宿る〉という文言自体そもそも存在しなかった。

ここで最後にV・クレンペラー¹⁴『第三帝国の言語（LTI）』（法政大学出版局、1974年）について言及しておこう。

ドイツにおいてナチス時代には文字の書体もジュタリーンと呼ばれる独特の書体が標準化された。同様に話す言葉もナチ党独特のものへと変質していったという。もともとフランス語、フランス文学研究者であったユダヤ人クレンペラーは、口語と文語の区別がなくなり、ナチ党という小さな集団の言葉がドイツ国民の言葉になっていく過程を克明に記録している。〈LTI〉はナチ独特の言葉を意味するクレンペラーの造語である。

ヒトラーが『わが闘争』を1925年に出版して、「ナチの言語の基本的特色は、この本によって文字通り確固不動のものとなったのである」「ナチの言語は一九三三年に小さな集団の言語から国民の言語となった。すなわち、それは政治、裁判、経済、芸術、科学、学校、スポーツ、家庭、幼稚園から保育所に至るまで、社会生活と個人生活のあらゆる領域を征服した」。

前記したように『わが闘争』やローゼンベルクの『二十世紀の神話』が聖典と化したため、その内容に従って現実がゆがめられた。ナチの言語で現実が切り取られたのである。ナチの言語は百万回も繰り返されて、大衆に刷り込まれ、機械的に、無意識に受け取られたという。偏向的に選別された言葉、一本調子のスローガンが吟味されることもないまま、垂れ流されて、教条として扱われた。個人の生活は社会の規範に合わせられ、言葉は多様な意味を失って痩せていった、とクレンペラーは指摘している。「“ごく僅かの砒素の一瓶”のように“無意識に吞み込まれ何の効き目もないようにみえはするが、しばらくするとやはりその毒性は現れる”のである」。それが人々の思考と習慣に影響を及ぼした。

この〈健全なる……〉はヒトラーも繰り返し『わが闘争』で使用した格言で、それはドイツでもスローガンと化して利用された。日本でもスポーツに人心を振り向けようとしたとき、この格言がスローガンと化して利用されたのである。〈健全なる……〉は〈不健全なる身体に不健全なる精神が宿る〉ことを言外に含みつつ、広く普及したのであった。

たとえば、作家・三島由紀夫は〈健全なる……〉のスローガンのなかで青年期を過ごした。「少年時代からの強烈な肉体的劣等感であって、私は一度も自分の肉体の繊弱を好ましく思ったこともなければ、誇らしく思ったこともなかった」（『実感的スポーツ論』）。その彼が30歳を過ぎてボディビルをはじめた。アメリカで知ったボディビルによって強靱な肉体を手に入れることが出来る。三島にとって光明であったろう。そこで帰国後、三島は日本におけるボディビルの草分け^{たまりひとし}玉利斎を訪ねた。

玉利はその回想で三島が次のように語ったことを記憶している。

日本には太宰治のような女々しい私小説を書く作家しか現れない。玉利さん、それはなぜだかわかるかい？ 不健康、不摂生を重ねて貧弱な身体しか持っていないからだよ。ヘミングウェイを見たまえ。彼はプロのボクサーと打ち合うほど強靱な身体を持っている。彼には身体を鍛える美学があって、それが文学に反映している。だからこそ、あの屈強な文体と作品のバイタリティが生まれたんだ。どうだ、君もそう思わないか？……（中略）……日本の物書きはたいがい太宰のカリカチュアさ。書けない書けないと机の前で髪をむしるのだけが得意でね。ヒロポンを打つか睡眠薬を飲む、カフェで女給を口説くという自堕落から一步も進歩していない。玉利さん、僕は断然ボディビルで身体を鍛えるよ。そして私生活でなく社会や世界を舞台としたスケールの大きな小説を書く。どうだ、おもしろい企てだろう。ハッハッハ（増田晶文『果てなき渴望』草思社、2012年）。

戦後になっても刷り込まれた言語と、それがもたらした身体観からは逃れられない。やすやすと毒気は抜けなかったのではない。ちなみに三島は、ボディビル以前の脆弱な身体のと

き、最もうれしかった記憶を、文芸評論家の小田切秀雄から「共産党にはいらないうか」と勧誘されたことと記している。そしてボディビル後に最も嬉しかった記憶をボクシングの「前座にでないか」と誘われたことだと記している¹⁵。このエピソードは妙に〈健全なる……〉と符合しているように思えないだろうか。じつは三島は小説『音楽』や評論『実感的スポーツ論』のなかで〈健全なる……〉の「宿る」が実際には存在しない、ユウエナリスの誤訳にすぎないことにも言及している。しかし同じ『実感的スポーツ論』の他所で次のように述べるのをみると、やはり毒気は抜けていない。

「三島さん、よく見ておきなさい。健全なる肉体には健全なる精神が宿る。この人の体の完璧な柔軟性、運動の巧緻性、……これでこそ人間なので、ここまで行つてはじめて人間の人格も高まるんだ。あんたの体じゃ、まだ人格なんぞ生まれませんよ」などと言っていたが、それから数日後、この助手が事務の金を持ち逃げしてしまったので「なるほど鈴木さん、健全なる肉体には健全なる精神が宿るね」と私が氏をからかったときの、氏の渋面を思い出すと、今でもおかしくなる。／しかし私も、肉体と精神の相関関係については久しく考え、久しく悩んできたのである。芸術家としてはむしろ、芸術の制作に必須な不健全な精神を強く深く保持するために、健全な肉体がいるのではないだろうか？ 人間性の見るも忌まわしい深部へ、深く、より深く井戸を掘り下げるために、鞏固な大理石の井戸側があるのではなからうか？

戦前の〈健全なる……〉が三島の青年時代に浸透していたことを考えれば、このスローガンがいかに人々に影響を与えたかを想わされる。三島由紀夫という作家はそのことを考えるヒントになるのではなからうか。この点については別稿を予定している。

5. おわりに

この格言の起源とされるユウエナリスが求めた精神は、禁欲であり、古代ローマの奔放な性の有様に対し、疑念を抱き、欲望をどう抑制するか、節制するための強い精神力の必要性を説いていた。しかも健全な肉体の持ち主ほどその墮落した状況にあった時代を諷刺し、そこで強い精神力が手に入るよう「……祈るがいい」としていたのである。

ちなみに、この詩人は同時代には無名で、4世紀後半からその名が知られるようになった。理由はおそらく313年ミラノ勅令が発せられ、ローマで禁欲的教義をもつキリスト教が公認されたことと無縁ではない。それ以後、この諷刺詩への共感がなされたのであろう。ヨーロッパ中世の厳密なキリスト教世界では身体を軽視したことはいうまでもない。たとえば、聖ベルナル（1090 - 1153）が、次のように述べる件からは、今日とは異なる身体観が見てとれる。

強壯で活動的な肉体では、心は常に弱く、なまぬるい。だが、虚弱な肉体では精神がより強く、より能動的に働いているのである(ヴァンダーレンほか前掲書〔1958年〕)。

その後、〈健全なる身体に健全なる精神が宿る〉という、この言葉はアルベルティらルネサンス期の人文主義者によって用いられるようになった(らしい)。中世キリスト教世界において「貶められた身体」は、その反動もあってか、はたまた身体を肯定的とらえようとする人文主義者らの願望が投影されてか、「……宿る」と真逆の意味合いをおびるようになったようである。

それにしても言葉は文脈を離れると、それぞれの時代の願望が投影され、錯誤をして変容していく。欧米における「……宿る」の起源は不明だが、日本には「……宿る」のかたちで移入された。そして、その格言が誤訳であるとの指摘もなされたものの、ほとんど無視され、再吟味されることのないまま流布し、戦前スローガンと化して利用された。

言葉は意味がよくわかっていて使用されるときと、わりによくわからずに使用されるときとがある。〈健全なる……〉は、その真意をたしかめられることもなく、漠然と使用されてきた。しかも「千古の眞理」とか「古代ギリシヤに於ける心身の調和的発展の思想に遡る」などというフレーズやイメージを伴うことで、根拠なく、正当化されたのである。むしろ、それゆえに出典や内容の吟味がなされなかったとも考えられる。

さらに思想善導が「日本主義」と結びつき、「国体」「日本的」「皇道」などの言葉が、やはり何の吟味もなく使用され、不幸な結果を招いた。〈健全なる……〉も、多くの識者や学生たちを不幸にする一因となったことは想像にかたくない。

戦前の青年にとって虚弱な肉体であること、またはスポーツをしないこと、それは即ち政治的な方向性を決定することにすらつながった。このことは三島由紀夫を考えるとときの一助ともなろう。さらには、この言説が戦前の徴兵検査を考える際にも、新しい視角を切りひらく可能性すらある。

注

¹ちなみに、この英訳は“Mens sana in corpore sano”または“A Sound mind in a sound body”ドイツ語では“Orandum est ut sit, Mens sana in corpore sano”となる。

²ユウェナリスが『諷刺詩』で何を意図したのかについては拙論「健全なる身体に健全なる精神が宿る」再考—格言の起源と日本における利用、その周辺に関する覚書—(『桐蔭論叢』第32号、2015年10月)を参照のこと。

³ほかに『日本醫事新報』には同年6月にも、遠藤に呼応して間中喜雄「健全なる精神は健全なる身體に宿る」が掲載されている。体育・スポーツ関係では水野忠文が『体育史概説—西洋・日本』(杏林書院、1961年)、『体育思想史序説』(世界書院、1967年)でこのことに言及したのが嚆矢のようである。

⁴日本では明治以来スペンサーの三育主義が、主知主義(知育偏重)に対して教育現場で主張された。そのとき〈健全なる……〉が

全人教育を称えるスローガンとして利用された。

⁵ただし、ヴァンダーレンほか『体育の世界史』(加藤橘夫訳、ベースボール・マガジン社、1958年)には、イタリア・ルネサンス万能の天才レオン・バッティスタ・アルベルティ(1404-1472)ら人文主義者たちが、この「……宿る」を体育の最高徳目として信奉していたという件があるから、この言葉はロック以前にすでに断定的に用いられていた可能性もある。原著にあたることができないため、深追いしないが、ここでは『体育の世界史』の記述を指摘するにとどめておこう。

⁶たとえば、洪井二夫『神ながらの道に培ふ興亜建設』(新生閣、1939年)には次のようにある。

「健全なる精神は健全なる身體に宿る」と、誠や、形は性質を作り、性質は形を造るのである。…／健全なる者は常に引込思案に墜る事無く、勞を厭はず、実行を拒まず、不義不正を却けて、勇壯邁進するの態度を生じ飽迄陽を愛し、陰を嫌ひ正を好み邪を排する様になるものである。故に勤勞を愛し、實行を貴び、日本古來の道を踐み行はんとするの士は須く心身を常に健全に保つて人格高潔なるを期すべきなのである。即ち心身健全ならば日本精神の體得、體現、繼承、傳達は期さずして到のである。

この引用は治安維持法が日本主義と結びついたことのみならず、〈健全なる……〉が、日本主義とも結びついた一例とみられる。「健全なる精神」が、治安維持法とあいまって日本主義とも結びつき、「健全」「善」なることは国体護持と日本主義を意味するようになっていたことをうかがわせる。と同時に戦前の天皇を中心とした国体を脅かす共産主義は、そのまま「悪」思想ということになるのはいうまでもない。肉体の「健康／不健康」は、「日本主義／共産主義」に類比されることにもなった。

⁷このあたりの事情については、坂上康博『権力装置としてのスポーツ—帝国日本の国家戦略』(講談社、1998年)に詳しい。後掲の北豊吉や山田敏正についても坂上がすでに言及している。

⁸たとえば、「悪思想」の説明として山田敏正「思想善導と體育」『體育と競技』(1928年8月号)において次のようにあるのが参考になる。「我が國の治安維持法は『國體を變革し又は私有財産を否認する目的を以て、其の實行及び協議に参加し又は煽動したる者に對する罰則』を主としたものである。即ち所謂危檢思想とは國體を變革し又は私有財産を否認するが如き思想を總稱してゐる。其の他憲法を見れば、如何なるものが危檢思想であるかは大體解る。／ 今一つは教育の基本たる國民道德に準據して略ぼ判断することが出来る。國家の理想に叛き、安寧を害し秩序を亂す恐れのある行為を誘發する如き一切の思想を惡思想と見て差し支えない」としているから、「不健全なる精神」や「惡思想」が共産主義を指していることがわかる。共産主義と病弱の間に相関があるという理解は〈……宿る〉をスローガンとして用い、定理として喧伝していることが前提になる。他所で山田は「肉體的病弱者を以て悉く惡思想の所有者と斷ずるが如きことがあらば、是は由々しい間違ひである」として完全なものではないと断りつつも、肉体の健否と精神について「只それ等の結合に於て、ある相關的傾向が見らるるというまでのことである」とも述べている。

⁹じつは内務省編纂『運動競技全書』(朝日新聞社、1925年〔大正14〕)の序文にはすでに「『健全なる身體に健全なる精神が宿る』とは古い諺ながら千古不磨の眞理である。靜かに社會の現状を眺め國家の前途を想ふ時に、今や正に健康なる身體と健全なる精

神とを保有せる國民を要望すること最も大なるものある……」とある。この序文は内務省衛生局長・山田準次郎の執筆だが、北の用いたフレーズと酷似しているから、以前から用いられていたフレーズであることがうかがえる。

¹⁰ 第一出版協会資料編集部編『新講話資料・青年處女思想善導編』（第一出版協会、1932年〔昭和7〕、「第十三講 體育と精神活動」126頁）などには三・一五事件で検挙された幸徳秋水らのほとんどが肺病を病んでいたとする記述などがみられる。以下抜粋。

▶ 昭和四年度に於ては二十萬圓を計上して専門學校や高等學校大學等の體育奨励、體育運動の普及改善をはかるといふ。……「而も、運動を適當になすことによつて、常に身體は健全である。身體が健全であれば病むことがない。従つて精神は常に爽であり、剛健である。古い言葉ではあるが、『健全なる身體には健全なる精神に宿る』である。従つて此度文部省が大いに體育を奨励するといふのは、體育それ自身のためは無論であるが一つには體育の奨励によつて國民に健全なる身體をもたらしことによつて、健全なる精神をもたせようと云ふのである。……▶ ところで、さきほどから、健全なる思想の持主たらしめんがために、一般國民、ことに青年體育を奨励するに至つたことを度々述べたが、その動機は何處にあつたかと云へば、昭和三年三月檢舉された共產黨員の多くが不健全なる身體の持主であつたことに端を發してゐるのである。もつともこれは今にはじまつたことではなく、かの幸徳秋水一派の不敬事件の時も、幸徳夫妻はもとより、他も不健康者が大部であつた。又、此度も非常に病弱者が多かつた。而も、その病弱と云ふのは現在ではほとんど不治とされてゐる肺病患者だつたのである。而もこの肺患にかゝるといふことは平素の衛生體育が十分ではなかつたからである。……。

また、ほかに下田次郎『運動競技と國民性』（右文館、1928年〔昭和3年〕）にも類似的記述がみられる。

……ロード・ミースは四十餘年前既に「我々の都市の罪惡の問題は、主として運動競技の問題である」といつてゐる。後に述べるように、古代ギリシヤに於て、身體の發達した者は惡を行わないとの信條には、相當の理由がある。犯罪、墮落、變質者の身體には、何處かに異常、發育不全、又は動的缺陷があるものである。／身體の意志の命令を實行する機関であるから、身體運動が自在でなければ医師の命令が阻まれて、その發達を妨げる傾向がある。……

¹¹ 藤村一雄『學生思想問題雜話 彼らはどうして左傾化したか』（日本評論社、1930年〔昭和5年〕）「一 どうして彼等は左傾したか」の項目には不健康が共產主義者という類比のみならず、容貌についても言及がなされている。以下抜粋する。

▶ 第二に擧ぐべきものは不健康であります。但し不健康に関しては、二つの見方があるやうです。即ち不健康が左傾する原因の一と見る見方と、反對に、左傾した結果が不健康をもたらしといふ此の二つであります。即ち一は原因と見るに反して他は結果と見るのであります。後の場合は勿論さうした事情は十分肯定されます」とか「左傾した學生を取扱つた人（人）には直ぐ目につくことではあります、彼等の多くは一種特別な風手を具へてゐます。外國でコンミュニストのことをlong haired man（長髪の人）といふ言葉

があるそうですが、我國の其の類の學生は、長髪とは限りません。然し彼等には、明らかに此處がと指定していふことは出来ませぬが、兎に角普通ではあり得ない容貌を持つてゐます。……

また、左翼學生の多くが結核だとする言説も見られる。

▶ 彼等左傾學生の幾割かは、確に不健康體であります。而して其の多くは呼吸器疾患であります。日本人の呼吸器疾患の多いことは統計に出てゐる通りであります、我が學生に多いことは實に驚くべき數であります。……高等専門學校以上の學校では、入學の際随分嚴重に體格検査を施行して、結核患者は拒否してゐるにも拘らず、尚年々學生の中から多數の結核患者を出してゐます。

¹² ちなみに、ナチス・ドイツ（国家社会主義ドイツ労働者党）でも軍国主義を推進するのにこの格言を利用したことは前記した。青少年の身体鍛錬が必要であるため、あたかも健全な身体と健全な精神が不即不離であることを強調したのである。ヒトラーはワイマール共和国における教育が知育に偏しているとして、体育の重視を『わが闘争』で強弁している。そのとき〈健全なる……〉が真理として語られる。

……なによりもまず、今までの教育に精神的教授と身体的教授の間の均衡をとり入れてゆかねばならない。今日、ギムナジウムと呼ばれるものはギリシアの模範を侮辱するものである。わが国の教育では、結局のところ、健全なる精神は健全なる身体にのみ宿りうるものであるということが、完全に忘れられている。個々の例外を除いて、国民大衆に注目するとき、とくにこの命題は無条件の妥当性を保っているのだ。／戦前のドイツにおいては、一般的にいつてこのような真理がもはや考慮されなくなった時期が存在した。……（『わが闘争』角川書店、1973年）。

われわれの想像以上に『わが闘争』の影響力は大きかった。ヒトラーは政権を取ってからは、『わが闘争』とアルフレート・ローゼンベルク『二十世紀の神話』は「ナチスの聖書」とされた（補足1）。また、ほかに〈健全なる……〉が言外に含む内容も述べている。

腐った肉体は輝かしい精神をふきこんでも、まったく美しくない。そのうえ肉体的に重い障害をもっており、性格において意志薄弱で、ぐらつき、そして卑怯な人間であるならば、最高の精神的教養もまったくりっぱなものにはならないであろう。ギリシアの理想を不滅ならしめたものは、すばらしい肉体の美と輝かしい精神と、最も高邁な心情のおどろくべき結合である。

実際、ナチスの党綱領第21条には「国家は母子保護と、幼年労働の禁止と、体操スポーツの義務を法律で定めて肉体的訓練を実施することに、青少年の肉体的訓練に従事する諸団体全部に対する最大の援助を通じて、国民保健の向上に意を用いねばならない」（『ナチス・ドキュメント』）とあることなどから『わが闘争』の内容が敷衍されていることがわかるだろう。ヒトラーは「余は知的教育を望まない」（ホーファー前掲書）（補足2）と知的教育を否定すらしている。ナチスのもとでは学校教育における体育の時間が増大し、初等教育に力を入れる一方、中・高等教育では年限が

短縮された。1933年4月には「ドイツにおける学校と大学の人員制限法」を制定して、高等教育機関における学生数を削減すらしめている。

この「健全なる……」にもとづき、軍国主義を推進するには青少年の身体鍛錬は不可欠として各種スポーツ団体もナチスの統制下におかれることになる。この格言は繰り返えられることで、刷り込まれ、「真実」とされた。しかもその背理として「不健全な身体に不健全な精神が宿る」ことを言外に含みつつである。そのため障害者や共産主義者もユダヤ人同様、強制収容所に送られた。また、ユダヤ人も身体的欠陥を持つ存在としてイメージされるようになるのは、この格言のスローガン化と無縁ではないだろう。

(補足1) アルフレート・ロゼンベルク(1893-1946)はナチスの初期の主要メンバーの一人で「トゥーレ協会」というアーリア人の優越を説く神秘主義の信奉者の一人でもある。この協会はイスラム神秘主義とルーン文字の起源をアーリア人に求めるルドルフ・フォン・ゼボッテンドルフ(1875-1945)が創設した宗教結社であった(森貴史『踊る裸体生活』勉誠出版、2017年)。このころ「アーリアの叡知」、アリオゾフィーを主張する思想家の中にはユリウス・ラングベーン(1851-1907、『教育者としてのレンブラント』)などがおり、ラングベーンは著書の中で自然賛美とともに、身体鍛錬による精神、道徳の健全を説いているから、「健全なる……」の広がる土壌がすでに準備されていたともいえるであろう。ドイツの遅れた近代化は、工業化、都市化、それらに反発する田園運動などを発達させた。そのなかに自然への回帰や、身体性への回帰がみられ、それがワンダーフォーゲル運動などにも通じていくのである。身体鍛錬の重視と、反知性主義的な傾向は何もヒトラーのみにみられる発想ではなかった。

(補足2) これは「ヒトラーの青年教育論」とされる記事で、もとはヘルマン・ラシュニク「ヒトラーとの対話」からの抜粋(ホーファ前掲書)。

¹³またヒトラーはワイマール期におけるブルジョワジー(上流階層)の性の乱れを強調することで支持を獲得した。じつは梅毒の恐怖を煽動し、その対策として性道徳秩序の必要性を強調したことがヒトラーの人気の背景にあることはあまり知られていないのではない。

¹⁴ヴィクトール・クレンペラーは1920年からドレスデン工科大学のフランス文学教授をつとめた人物で、ナチスの政策から教職を追われたのちも、近隣の人々の庇護を受けてナチ時代をドイツで暮らした。

¹⁵三島は次のようにうれしい誘いの経験を記している。

私は今でも、戦後間もなく、共産党へはいらないかと言った小田切秀雄氏の言葉と、前座に出ないかと言った平沢氏の言葉と二つを、私の人生における二つのもっとも稀有なうれしい誘いの言葉として、心にとどめているのである。

ここで「平沢氏の言葉」とはボディビルをして手に入れた肉体でボクシングの前座に誘われたことを指している。

(参考文献)

1. 今泉隆裕「〈健全なる身体に健全なる精神が宿る〉再考—格言の起源と日本における利用、その周辺に関する覚書—」(『桐蔭論叢』第32号、2015年10月)
2. 今村嘉雄『学校体育の父 リーランド博士』(不昧堂、1968年)・ヴァンダーレンほか『体育の世界史』(〔加藤橋夫訳〕ベースボール

マガジン社、1958年)

3. 遠藤繁清が「『健全なる精神は健全なる身体に宿る』に就て」(『日本醫事新報』1955年4月)
4. 北豊吉「体育運動と思想問題」(『体育と競技』1928年10月)
5. クレンペラー、ヴィクトール『第三帝国の言語〈LTI〉』(〔羽田洋ほか訳〕法政大学出版局、1974年)
6. コルバン、アラン「性病の脅威—公衆衛生による予防と道徳による予防」(『現代思想(特集・流行病)のエピステーメー』1992年6月)
7. 田中祐吉(田中香涯)『間違だらけの衛生』(大阪屋號書店、1920年)
8. 坂上康博『権力装置としてのスポーツ—帝国日本の国家戦略』(講談社、1998年)
9. 下田次郎『運動競技と國民性』(右文館、1928年)
10. 戸坂潤「学生スポーツ論」(『戸坂潤全集』第四巻、勁草書房、1966年)
11. 第一出版協会資料編集部編『新講話資料・青年處女思想善導編』(第一出版協会、1932年)
12. 内務省編纂『運動競技全書』(朝日新聞社、1925年)
13. 野上莊吉『日本教育界暴露記』(自由社、1930年)
14. 荻野富士夫「文部省思想統制体制の確立・学生運動取締と思想善導」(『歴史評論』校倉書房、1983年2月)
15. 鳩山一郎『スポーツを語る』(三省堂、1933年)
16. ヒトラー、アドルフ『わが闘争』(〔平野一郎ほか訳〕角川書店〔角川文庫〕、1973年)
17. 藤村一雄『學生思想問題雑話 彼らはどうして左傾化したか』(日本評論社、1930年)
18. 洪井二夫『神ながらの道に培ふ興亜建設』(新生閣、1939年)
19. 増田晶文『果てなき渴望』(草思社、2012年)
20. 間中喜雄「健全なる精神は健全なる身体に宿る」『日本醫事新報』(1955年6月)
21. 三島由紀夫『音楽』(新潮社〔新潮文庫〕、2006年)
22. 三島由紀夫『実感的スポーツ論』(共同通信社、1984年)
23. 水野忠文ほか『体育史概説—西洋・日本』(杏林書院、1961年)
24. 水野忠文『体育思想史序説』(世界書院、1967年)
25. 森貴史『踊る裸体生活』勉誠出版、2017年)
26. 山田敏正「思想国難に面して」(『體育と競技』1928年6月号)
27. 山田敏正「思想善導と體育」(『體育と競技』1928年8月号)
28. ユウェナリス、デキムス・ユニウス『ローマ諷刺詩集』(〔国原吉之助訳〕岩波文庫、2012年)
29. ホーファー、ワルター『ナチス・ドキュメント』(〔救仁郷繁訳〕ベリかん社、1975年)